



# 菊川市文化振興計画

## 資料編

平成24年度～平成33年度  
(2012年～2021年)

平成24年6月

静岡県 菊川市

---

## 目 次

---

<b>① 市の沿革</b>	
1.1) 気候	1
1.2) 河川「菊川」について	1
<b>② 芸術・文化</b>	
2.1) 市内の芸術・文化	8
2.2) 指定文化財	11
2.3) 市の偉人・先人	13
2.4) 埋蔵文化財	19
2.5) 地名	24
2.6) 方言	32
<b>③ 菊川市総合計画・行政評価     市民アンケート調査結果</b>	33
<b>④ 市の指標</b>	38

---

# ① 市の沿革

## 1-(1) 気候

本市は天竜川下流部と同じ東海気候区に属する。東海気候区は、主に本州の太平洋岸に沿って北上する黒潮(暖流)による影響が大きく、本州の中で最も温暖な地域で、特に、冬季が温暖であることが特徴である。また、冬になると北西からの強い季節風「からっ風」が吹く。降水量は全国平均以上であり、農業生産には十分な降水量がある。

## 1-(2) 河川「菊川」について

本市の歴史・文化に大きく影響を及ぼしてきた一級河川「菊川」について、説明する。

資料：河川整備基本方針 菊川水系

(国土交通省 [http://www.mlit.go.jp/river/basic\\_info/jigyo\\_keikaku/gaiyou/seibi/kikugawa\\_index.html](http://www.mlit.go.jp/river/basic_info/jigyo_keikaku/gaiyou/seibi/kikugawa_index.html))  
中部地方の古地理に関する調査報告書 天竜川・菊川 川の流れと歴史のあゆみ (平成 21 年 3 月 国土交通省)

### 1) 概要

「菊川」は、掛川市の栗ヶ岳(標高 532m)を水源とし、上流部に広がるなだらかな掛川丘陵を南東に流下して遠州灘に注ぐ、幹川流路延長 28 km、流域面積 158 km<sup>2</sup>の一級河川である。急流が多い静岡県の一級河川の中では、例外的に勾配が緩い河川である。水運の発達は見られず、移動手段は主に陸上交通に頼ってきた。

また、河川改修以前は中・下流に広がる低地で激しく蛇行していたため、多くの水害を発生させた。昭和 8 年に国直轄事業による河川改修が開始され、現在、河川の蛇行はほぼ解消している。

### 2) 地形・地質

「菊川」本川及び主要支川の周囲に発達した低地(菊川平野)を取り囲むように北に掛川丘陵東に牧之原台地及び南山丘陵、西に小笠山丘陵が分布している。いずれも、古大井川から供給された土砂が堆積して形成された地形である。これらに囲まれた菊川平野は、「菊川」の堆積作用で形成された低湿な低地(沖積低地)で、第四紀更新世に潟湖(ラグーン)を形成していたと考えられている。その後、海水準変動に伴い、今のような陸地となった。

潟湖であった期間には、多くの土砂が堆積し、その深く軟弱な沖積層により、県有数の稲作地帯として知られるようになった。しかし、排水施設整備以前は、排水問題に長い間悩まされ、地震動に対してもきわめて脆弱で、昭和 19 年の東南海地震では、大きな被害を受けた。

菊川平野をふさぐように、南側には、天竜川から供給される土砂によって形成された砂丘が発達している。

### 3) 利水

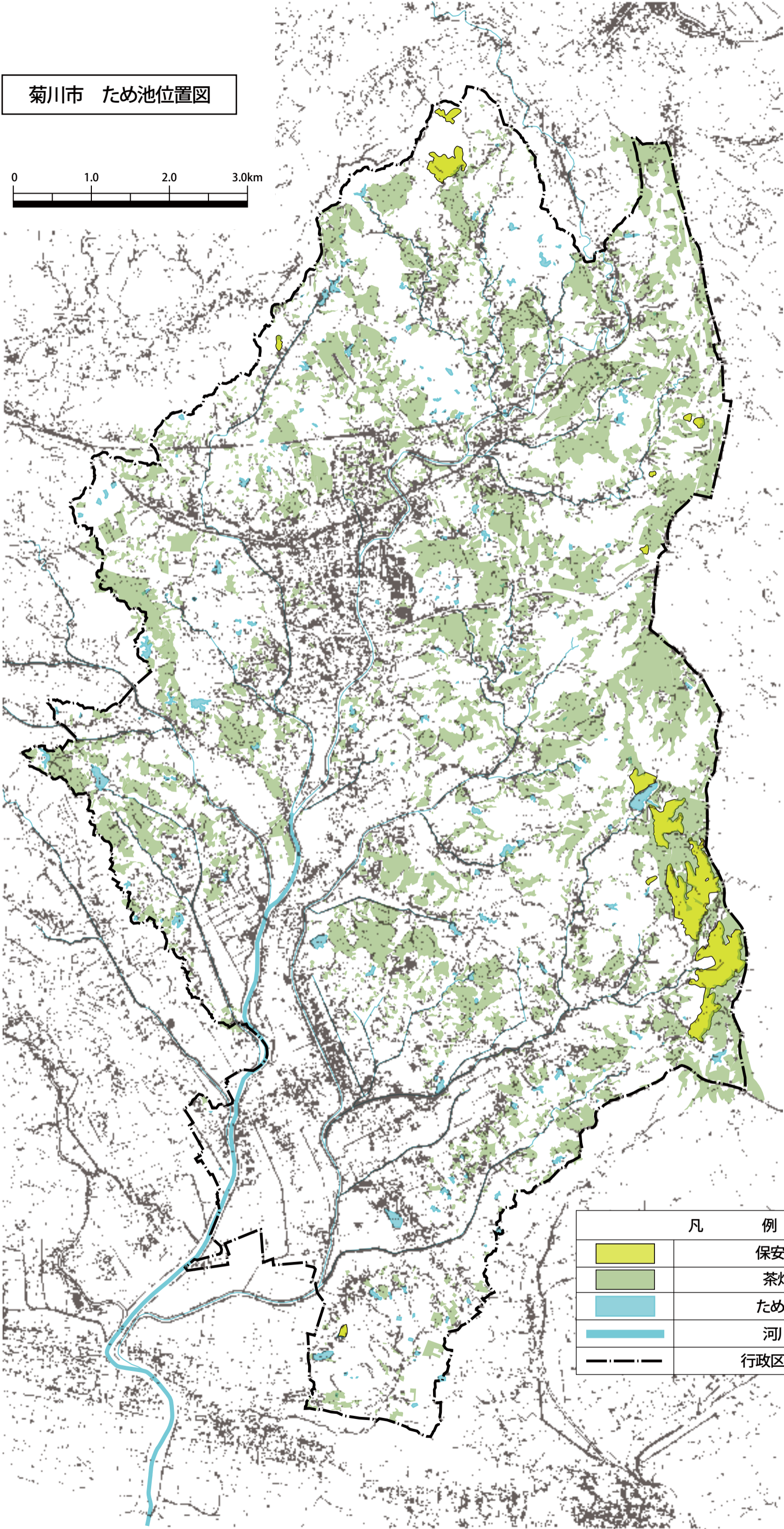
「菊川」は流域面積が狭く、山林面積も約 23%と少ないため、水不足が発生しやすく、本市は県内有数の干ばつ地域である。このため、用水路やため池の築造にあたり、数多くの努力や苦労があった。現在は、国営大井川用水の完成（昭和 43 年）により、東隣の大井川水系から用水の供給を受けるなど利水事業が進展したため、渇水問題はほぼ解決している。



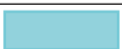

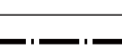
#### ■ ため池

- ため池は、中流部から下流部にかけて見られる丘陵地に細かく入り込んでいる谷を利用した「谷池」が多い。
- この地域の丘陵地は、一般的に細かい粘土やシルト質の堆積物から構成されているため保水力が高く、ため池に適していた。
- ため池が最も多くつくられたのは、江戸時代の末期から明治時代にかけての期間で、現在は、灌漑用途のほか洪水調節などの防災機能や、豊かな植生や水を利用したレジャー機能などの役割も担っている。



菊川市 ため池位置図



凡	例
	保安林
	茶畑
	ため池
	河川
	行政区域界

## 4) 治水

中世以前は、土木技術が十分に発達していなかったことなどから、全国で見ても記録に残るような大規模な治水事業は多くはない。江戸時代になると戦乱の世から解放され、領内の経済政策が重視されるようになり、治水・利水事業による農業生産の安定・強化が取り組まれるようになった。

菊川流域においては、昭和8年に始まる河川改修前は激しく蛇行していたこと、菊川平野が軟弱地盤であることなどから、本市を含む中流域から下流域にかけて、水害が多く発生した。

水害は、主に内水氾濫（河川の水位が上昇し、堤内地の水が本川へ排水できなくなることにより生じる氾濫）によるもので、海岸線沿いに発達した砂丘が洪水の流下を妨げるため、一度湛水すると引くまでに時間がかかり、被害を拡大させた。人的被害よりも、農業をはじめとした生産手段に甚大な被害が多い。

さらに、江戸時代以前まで天領や旗本領などの領地が錯綜しており、一貫した治水対策が行われなかったこと、干ばつ地域であるため排水路の整備が進んでいなかったことも、被害の拡大に拍車をかけた。

※本市における、「菊川」の利水・治水に尽くした人々については「2-(3) 市の偉人・先人(P13)」を参照。

## 5) 水質

近年10か年のBOD<sup>\*</sup>75%値の平均は下流国安橋（B類型、掛川市）で環境基準を満たしているものの、上流加茂橋（A類型、菊川市）及び支川牛渕川の堂山橋（B類型、菊川市）で環境基準を満たしていない状況にある。一方、流域の地質に起因して河川水が白濁している大井川水系に依存していることから「菊川」の河川水は白濁化している。

※BODとは水の汚染を表す指標の一つで、好気性微生物が一定時間中に水中の有機物（汚物）を酸化・分解する際に消費する溶存酸素の量（生物化学的酸素要求量）です。

（Weblio 辞書ホームページ：<http://www.weblio.jp/content/BOD>）

## 6) 自然

丘陵地を流下する上流部、三角州的性格をもつ中・下流部、広い静穏水域と小規模な干潟がある河口部に区分され、本市は、上・中流部に該当する。

### ① 全体

さまざまな自然環境に富むとは言えないが、生息する魚種が多く、国土交通省が実施している河川水辺の国勢調査では、95種類が確認されている。これは、中部地方整備局の管轄する15河川のなかで3番目に多い。また、ホトケドジョウなど絶滅のおそれが危惧される貴重な特定種は25種と、中部地方整備局の管轄する河川の中で天竜川と並んで最多である。

魚種分布の特徴として、汽水魚や海水魚、淡水域と海水域を往来する回遊魚が多く、

純淡水魚の種類がそれほど多くない。これは、下流域がきわめて低平であり、海水の侵入が起りやすいことと、河川の水質が改善傾向にあることから、さまざまな種類の魚が生息できる環境が形成されているためだと考えられている。さらに、第二次世界大戦後の大井川用水の開削に伴って大井川由来の魚種が入り込むようになったことも、「菊川」で多くの魚種が確認される要因の一つと考えられる。

## ② 上・中流部

川幅が狭く、「菊川」本支川の河川敷はほとんどが草地となって単調である。また、連続する床止め工等付近には淵や平瀬が多く形成されているが、ほとんどの床止め工で水棲生物の移動障害が危惧される。さらに水域～陸域の連続性も護岸などにより乏しくなっている。しかし、河川内にはミゾコウジュやカワヂシャ（環境省レッドデータブック/準絶滅危惧(NT)）等の湿性な草地が見られる。

底生動物は、上流の<sup>たてが</sup>立ヶ谷橋（菊川市）付近では、水質は比較的良好であり、清冽な水域に生息する種が多い。また瀬、淵、河岸の植物など、多様な河川環境が見られることから確認種数も多い。

上・中流部	確認されている主な種類
底生動物	フタバコカゲロウ、エルモンヒラタカゲロウ、アカマダラカゲロウ、ウルマーシマトビケラ、キイロカワカゲロウ、ニシカワトンボ、コオニヤンマ、コヤマトンボ
魚類	カワムツ メダカ（環境省レッドデータブック/絶滅危惧Ⅱ類(VU)、静岡県レッドデータブック/絶滅危惧Ⅱ類(VU)）
植物	ヨシ群落、ツルヨシ群落、オギ群落 ミゾコウジュ カワヂシャ（環境省レッドデータブック/準絶滅危惧(NT)）
鳥類	イカルチドリ、タゲリ
両生類・爬虫類・哺乳類	トノサマガエル、カヤネズミ

### ③ 下流部

水域～陸域の連続性が乏しい「菊川」にあつて、連続性が比較的確保されている区間であり、河口～3 km付近までは自然河岸が多く見られる。部分的にある高水敷はグラウンド等の利用や草地が見られる。沿岸一体は遠州灘鳥獣保護区及び御前崎遠州灘県立自然公園に指定され、「菊川」では河口～約2 km付近までがこの区間内にある。

底生動物は、感潮域の最上流部ということを反映した種類が多く生息する。

下流部（掛川市）	確認されている主な種類
底生動物	イシマキガイ、ミゾレヌマエビ、テナガエビ、ゴカイ（ <sup>かしま</sup> 鹿島橋 <sup>ぼし</sup> 付近）
魚類	カワムツ、メダカやシロウオ
植物	ヨシ群落、ツルヨシ群落、オギ群落
鳥類	チュウサギ、ミサゴ、タゲリ
両生類・爬虫類・哺乳類	トノサマガエル、カヤネズミ、クサガメ

### ④ 河口部

河口砂州と小規模な干潟、ヨシ原が広がる塩性湿地環境を形成している。汽水の混じる静穏水域は多くの水鳥の越冬地で、小規模な干潟はサギ類の餌場になっている。

大東マリーナ、温泉施設のほか、太平洋岸自転車道橋「<sup>しおさいぼし</sup>潮騒橋」が整備され、マリンスポーツ等様々なレジャーに利用されている。

河口部（掛川市）	確認されている主な種類
底生動物	チゴガニ、ハマガニ、アシハラガニ、ヤマトスピオ、モエビ、ノコギリガザミ、ゴカイ、ケフサイソガニ
魚類	シロウオ、ヒモハゼ
植物	シオクグ・イソヤマテンツキなどの塩沼植物、ハマヒルガオなどの海浜植物
鳥類	イカルチドリ、コアジサシ、カモ類
両生類・爬虫類・哺乳類	—



## 7) 河川の利用

「菊川」は川幅が狭く、国安遊歩道公園（掛川市）や青木前芝生広場（菊川市）では、スポーツレクリエーション施設として利用されている。また、堤防は通学路、散策等として利用されている。河口部には、河川改修と合わせて水面利用の適正化を図るために平成4年に整備された大東マリーナ（掛川市）を拠点に水面利用がなされている。

### □ 高田地区河川利用推進事業（国土交通省）

この事業は、菊川水系河川環境管理基本計画に基づき、菊川沿川の環境整備を通じて、地域住民の憩いや潤いのある生活の向上を図ることを目的とし、サイクリングロードや沿川住民の身近なレクリエーション施設、良好な自然環境に親しむ場の整備を地域とともにいった。

No.	整備内容	No.	整備内容
①	階段護岸整備	⑦, ⑧	川の一里塚（河道整備等）
②, ③, ④	川の一里塚（親水護岸整備）	⑨	川の一里塚（法面緑化）
⑤, ⑥	川の一里塚（国・公園基盤整備） 川の一里塚（自治体・公園整備）	⑩～⑯	サイクリングロードの整備



資料：河川整備基本方針 菊川水系 菊川総合水系環境整備事業（河川利用推進）  
（国土交通省 [http://www.mlit.go.jp/river/basic\\_info/jigyo\\_keikaku/gaiyou/seibi/kikugawa\\_index.html](http://www.mlit.go.jp/river/basic_info/jigyo_keikaku/gaiyou/seibi/kikugawa_index.html)）

## ② 芸術・文化

### 2-(1) 市内の芸術・文化

寺社	
文 化	内 容
えいほうじ 永寶寺	<ul style="list-style-type: none"> <li>境内にある観音堂は、十一面観世音菩薩を本尊とする遠江三十三所観音霊場第二十七番札所。</li> <li>樹齢2百年の<sup>かいどう</sup>海棠がある。</li> <li>寺の周辺には、下池・中池・新池と3つの池があり、下池の浮島に弁財天を祀って雨乞いをした歴史を持つ。近年では、農業用水として大井川の水を引き、毎年4月に豊作を祈願して水源祭が行われている。</li> </ul>
ちようかいじ 潮海寺	<ul style="list-style-type: none"> <li>奈良時代の聖武天皇のころ（おおよそ750年）に、<sup>ぎようき</sup>行基により開かれたと伝えられる古刹<sup>こさつ</sup>。</li> <li>3年に1度、7月下旬に3日間行われる「潮海寺八坂神社祇園祭り」では、市の無形民俗文化財に指定されている「潮海寺祇園お囃子」に合わせて、屋台が仁王像の石段を下りまた上がる。</li> <li>今でも塩水が湧き出るといわれる「潮井戸（塩井戸）」への参拝を含めた、疫病退散と五穀豊穡を願う農神祭が平安時代から続けられている。</li> </ul>
ほうおんじ 報恩寺	<ul style="list-style-type: none"> <li>慶長9年（1,604年）の創建で、本尊は行基菩薩が木の根で作ったとされる<sup>しやかわにによらい</sup>釈迦牟尼如来の座像。</li> <li>毎年3月15日に釈迦祭りが行われ、植木市が開かれている。</li> </ul>
いなりじんじや 井成神社	<ul style="list-style-type: none"> <li>今川義元の元武将・<sup>みうらぎようぶ</sup>三浦刑部が祀られている神社。</li> <li>三浦刑部は、加茂地区の農業用水を確保するため、天正11年（1583年）～文禄3年（1594年）の年月をかけ「加茂井水」と呼ばれる用水路をつくった。</li> <li>毎年4月の第1日曜日には、三浦刑部の徳を称える祭りが行われている。</li> </ul>
おうしやうきやういん 応声教院	<ul style="list-style-type: none"> <li>京都知恩院末、遠江十二支辰巳霊場で、<sup>あじやり</sup>阿闍梨伝説の縁起書や準国宝の阿弥陀如来座像などの宝物がある。</li> <li>山門（切妻造りの8脚門）は、寛永3年（1628年）徳川秀忠により静岡市の<sup>ほうだいん</sup>「宝台院」に築造されたものが、大正7年（1918年）、この地に移築された。昭和29年に国の重要文化財に指定されている。</li> </ul>
ぜんしやうじ 善勝寺	<ul style="list-style-type: none"> <li>医者の本間さまと狐の民話の舞台として親しまれている。</li> <li>門前にある楠は寺の鎮守木であり、樹齢約400年で、市指定天然記念物に指定されている。</li> </ul>
あんこうじ ろっかくどう 安興寺（六角堂）	<ul style="list-style-type: none"> <li>永正11年（1,514年）に雪窓鳳積禅師（せつそうほうしゃくぜんし）により創建された。寛政10年（1,798年）に建立した六角堂は、京都の六角堂を模して正面に聖観音像を安置し、西国三十三番観音をともに祀っている。</li> <li>六角堂の観音像の御開帳は、毎年8月のお盆の1日のみ。</li> </ul>

## 遺跡等

文 化	内 容
よこちじょうあと 横地城跡	<ul style="list-style-type: none"> <li>室町期の遠江国有力国人横地氏の本城として築かれた山城。</li> <li>平成 16 年 9 月に国指定史跡に指定された。</li> </ul>
つつみしろあと 堤城跡	<ul style="list-style-type: none"> <li>牛湫川にかかる城下橋の東側の小山（標高 36.4 メートル）。</li> <li>永正年間（1,504 年～1,521 年）に今川家臣・松井左衛門尉信薫が築城したという記録が残されている。</li> </ul>
くろだ けだいかん やしき 黒田家代官屋敷	<ul style="list-style-type: none"> <li>この地を治めた旗本本多氏の代官の屋敷。</li> <li>長屋門と母屋をはじめ米蔵・東蔵及び濠を含めた屋敷全体が、国の重要指定文化財。</li> <li>代官屋敷資料館は、黒田家の蔵に保管されていた鎧兜や月琴、蒔絵文箱など、貴重な品々を展示している。</li> </ul>
しょうりんじ 正林寺	<ul style="list-style-type: none"> <li>今川義忠を弔うため、1517 年に義忠の子・氏親がこの地に「昌桂寺」を建立。のちに「正林寺」となった。</li> <li>市指定の有形文化財「今川六代義忠の木像（香を聞く義忠像）」が安置されている。</li> <li>本堂には、雅号・月花園が描いた、4 枚 1 組で左右 1 対の襖絵がある。</li> </ul>

## 自然

文 化	内 容
かみくらさわ 上倉沢棚田	<ul style="list-style-type: none"> <li>市の北東部、牧之原台地西斜面のすりばち状の地形のなかに残る棚田。地元では、千榎と呼ぶ。</li> </ul>
かたは あし 片葉の葦	<ul style="list-style-type: none"> <li>風の強い遠州地方では、各地で片葉の葦が見られ、伝説もある。</li> </ul>
みさわ さんどぐり 三沢の三度栗	<ul style="list-style-type: none"> <li>遠江には、栗の実が 1 年に 3 度実るので、「三度栗」と呼ばれる栗の木が各所にあり、“遠州の七不思議”の 1 つに数えられている。</li> <li>三沢（菊川市）にある「三度栗」は、村を訪れた弘法大師が、子どもたちがくれた栗の実のお礼に、栗が 1 年に 3 度なるようにしたとの言い伝えがある。</li> </ul>
ししが はなとりであと 獅子ヶ鼻砦跡	<ul style="list-style-type: none"> <li>徳川家康が天正 8 年（1580 年）6 月に、高天神城を包囲攻撃するために築いたもの。</li> <li>笹ヶ峰御殿（小笠山砦）・中村砦・能ヶ坂砦、火ヶ峰砦・三井砦などともに 6 砦の一つ。</li> </ul>
ひつるぎさん 火剣山	<ul style="list-style-type: none"> <li>本市の最高峰。山頂の展望台からは、眼下に大茶園、南に遠州灘、西は浜松市街、北は南アルプス支脈粟ヶ岳東に牧之原台地と眺めることができる。</li> <li>毎年 4 月には「わらびまつり」を行っている。</li> </ul>

## 美術館等

文 化	内 容
歴史街道館	<ul style="list-style-type: none"> <li>遠州と信州を結んだ塩の道をはじめ、変わりゆく街並みの風景を半世紀にわたり描き続けてきた本市出身の故 杉山良雄の作品約600点を収蔵・展示している。</li> </ul>
常葉美術館	<ul style="list-style-type: none"> <li>常葉学園内の美術館で、特別企画展開催時のみ一般公開される。</li> <li>曾宮一念や小栗哲郎、渡辺華山、谷文晁などの近代絵画を主に所蔵している。</li> </ul>
ギャラリー画禅庵	<ul style="list-style-type: none"> <li>水墨画家・故佐々木鉄心氏のギャラリー。</li> <li>鉄心氏的水墨画常設展示を行っている展示室のほか、茶室や囲炉裏部屋がある。</li> </ul>
いなかおもしろ体験処彦一塾	<ul style="list-style-type: none"> <li>旧農家を改築した建物で、薪割りや風呂焚き、かまどでご飯炊きなど昔の生活を体験できる。</li> <li>そば打ちや、豆腐づくりなどの体験セミナーもある。</li> </ul>



## 2-(2) 指定文化財

指定文化財一覧			種 別	名 称	指定年月日	
国	重要文化財	建 造 物	おうしやうきやういん	応声 教院山門	S29. 9. 17	
			くろだけ	黒田家住宅(主屋・長屋門・米蔵・東蔵)	S48. 6. 2	
	記 念 物	史 跡	きくかわじやうかんにせきぐん	菊川 城 館遺跡群	H16. 9. 30	
			たかだおおやしきいせき よこち しじやうかんあと	高田大屋敷遺跡・横地氏城館跡		
県	有形文化財	書 跡	しほんぼくしよだいはんにやきやうおりほん	紙本墨書大般若経折本(写本)	S35. 2. 23	
			しほんぼくがたんさいさんすいず	紙本墨画淡彩山水図	S58. 9. 27	
	記 念 物	史 跡	ふなくぼこふん	舟久保古墳	S52. 3. 18	
	民俗文化財	無 形 民 俗	ても	手揉み製茶関係器具類	S63. 12. 24	
市	有形文化財	建 造 物	ちやうかいじにおうもん	潮海寺仁王門	S35. 2. 23	
			だいてうりゅうじんじや	大頭龍神社の鳥居	S35. 2. 23	
			彫 刻	よしただ	今川六代義忠の木像	H2. 4. 1
			絵 画	じゆけいに	寿桂尼画像(掛軸)	H2. 4. 1
	記 念 物	史 跡		大徳寺の古墳	S35. 2. 23	
				平尾八幡宮奉還時建立大鳥居の礎石 <small>そせき</small>	S59. 3. 26	
				朝日神社古墳	H 9. 10. 4	
		書 跡		平尾八幡宮の俳句額	S35. 2. 23	
				平尾八幡宮の棟札	S59. 3. 26	
				平尾八幡宮神社社号彫刻拝殿額	S59. 3. 26	
				平尾八幡宮宝永年間神無月奉納俳句額	S59. 3. 26	
		考 古 資 料		平尾八幡宮中世紀河童鬼瓦他数点	S59. 3. 26	
	天然記念物		善勝寺楠	S47. 8. 1		
			熊野神社なぎ	S53. 6. 7		
	民俗文化財	有 形 民 俗		平尾八幡宮寛政七年御輿 <small>みこし</small>	S59. 3. 26	
		無 形 民 俗	ちやうかいじぎおんはやし	潮海寺祇園お囃子	S35. 2. 23	
			こくぞうさんふくぞういんせつぶんさい	虚空蔵山福蔵院節分祭	H9. 1. 29	
だんびらお			段平尾のさんげさんげ	H20. 3. 11		

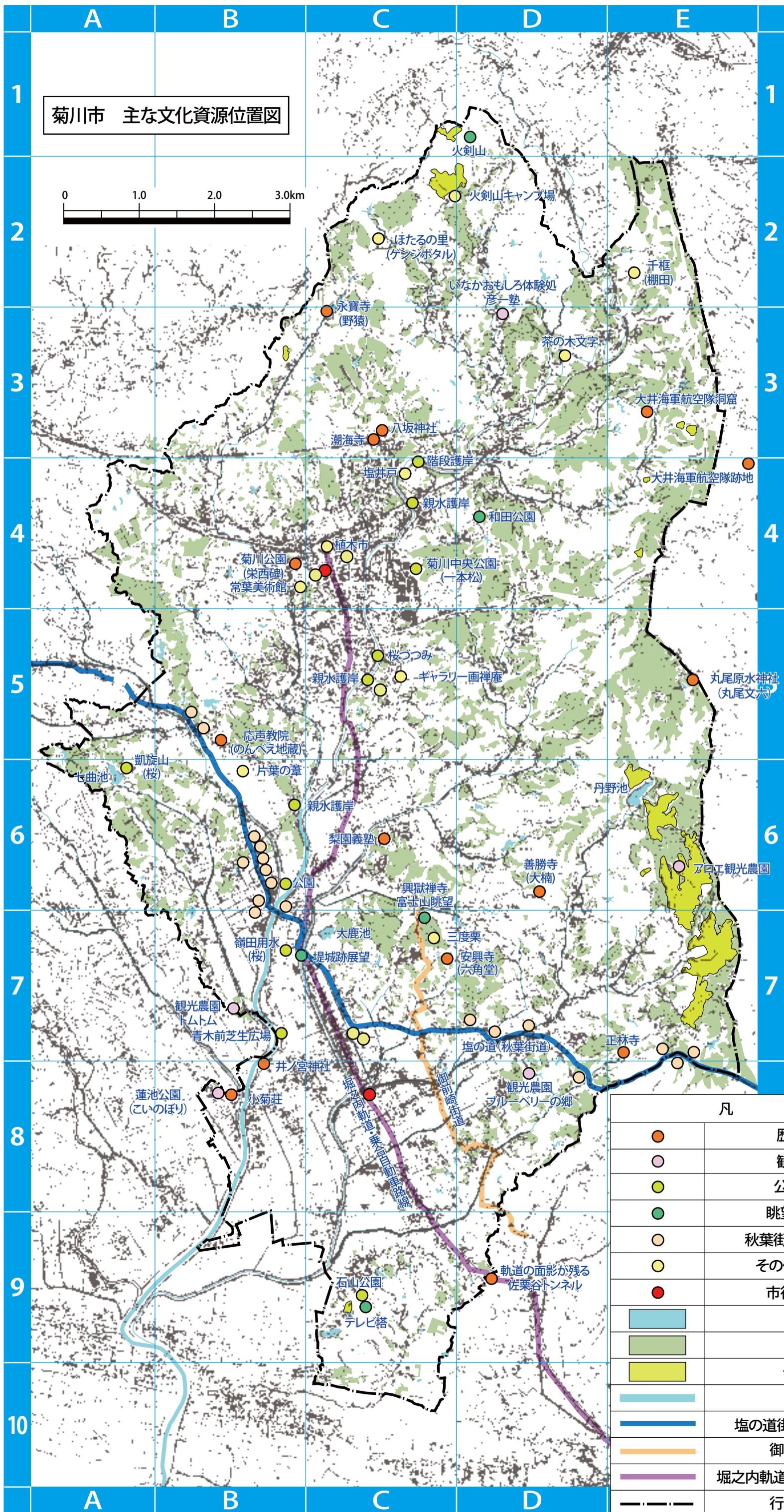
資料：本市ホームページ



黒田家住宅(長屋門)



平尾八幡宮寛政七年御輿



菊川市 主な文化資源位置図



凡 例	
<span style="color: orange;">●</span>	歴史資源
<span style="color: purple;">●</span>	観光資源
<span style="color: green;">●</span>	公園・自然
<span style="color: blue;">●</span>	眺望ポイント
<span style="color: yellow;">●</span>	秋葉街道遺跡・遺物
<span style="color: lightgreen;">●</span>	その他文化資源
<span style="color: red;">●</span>	市役所、支所
<span style="color: lightblue;">■</span>	ため池
<span style="color: lightgreen;">■</span>	茶畑
<span style="color: yellow;">■</span>	保安林
<span style="color: lightblue;">—</span>	河川
<span style="color: blue;">—</span>	塩の道街道(秋葉街道)
<span style="color: orange;">—</span>	御前崎街道
<span style="color: purple;">—</span>	堀之内軌道・乗合自動車路線
<span style="color: black;">- - -</span>	行政区境界



## 2-(3) 市の偉人・先人

	名 前	功 績
河川改修に貢献	関口隆吉 <small>たかよし</small> 天保 7年(1836)生 明治 32年(1899)没	<p>明治維新により職を失った武士の救済策の一つとして<b>牧之原開拓事業</b>があった。父の生家が御前崎市佐倉にあった関係でこの地方に詳しい隆吉が、事業の具体策を進言して金谷原開墾方頭取並を命ぜられ、入植の先頭に立った。隆吉は現在の本市月岡の地に家を持ち、<b>開墾</b>に取り組んだ。</p> <p>また、明治 17 年 9 月には静岡県県令（初代静岡県知事）になり、県内には河川が多く旱害、洪水、潮害などが問題となっていたことから、<b>河川改修等の治水事業に力を注いだ</b>。</p> <p>「菊川」の治水計画も、隆吉の命により立案され、その後大正 11 年まで何度か調査・立案がされたが、最終的に採択されることはなかった。昭和 8 年からの国の直轄事業により、改修がなされた。</p>
	黒田定七郎 <small>さだしちろう</small> 文久元年(1861)生 昭和 6年(1931)没	<p>定七郎は、大井川町の池谷家に生まれ、黒田家（城東郡嶺田村）に養子にきた。</p> <p>黒田家は、代官を務めており、広い土地をもつ地主で、20 代目となった定七郎は、<b>篤農家*</b>の加藤新蔵や黒田幸吉などとともに農事懇談会を組織し、農会長となって産業振興を図った。</p> <p>また、河川改修運動に同士を集結し、「菊川」の<b>河川改修に力を注いだ</b>。明治 43 年 8 月の大雨による牛渕川の堤防欠潰では、大勢の人を指揮して堤防を復旧し、被害の拡大を防いだ。</p> <p>一方で、好運寺（下平川）の松浦禅雄師の下で修行し、子ども教育の基本は家庭にあるとして、家庭会を発足させ、家庭教育の大切さを説いた。</p> <p>そして、そのころ珍しかった<b>蓄音機</b>（レコードプレーヤー）やオルガンを学校に寄付したり、教育講話をしたりするなど、地域の子どものための教育に尽くした。</p> <p>（篤農家*：農業に熱心で研究的な人）</p>
	菊川改修期成同盟会 <small>かいしゅうきせい</small>	<p>昔の「菊川」は、川幅が狭く蛇行していたため、洪水をおこして堤防を決壊し、多くの水害を引き起こした。</p> <p>そのため、大正 10 年（1921 年）に菊川改修期成同盟会がつくられ、「菊川」堤防の改修工事を国や県に何度も陳情した。松下幸一は、この同盟会の中心になって活躍した。</p> <p>結果、昭和 8 年（1933 年）に国の直轄事業として「菊川」の改修工事が始まり、戦時中でも工事が続けられた。食料を多く作るために「菊川」の水が必要だったこともあるが、同盟会の熱心な働きかけにもよるものと考えられる。しかし、時局がら工事は大幅に停滞してしまった。</p>

	名 前	功 績
用水整備に貢献	みうらぎょうぶ 三浦 刑部 あさえもん ・浅右衛門 かんえもん ・勘右衛門 (生没年不詳)	<p>今川義元の武将であった三浦刑部は永禄3年(1560年)、義元が桶狭間の戦いに敗れた後、百姓になって二人の息子(浅右衛門・勘右衛門)と共に加茂村に住みついたといわれている。</p> <p>加茂村は「菊川」と西方川に囲まれているものの川床が低く、その水を米作りや生活に利用できなかった。</p> <p>「菊川」の上流から水を引くためには、本所村と半済村、潮海寺村までさかのぼって堰を設け、加茂村まで水路を引く必要があった。各村はすべて領主が違い、他領の土地を調査することができなかったため、狂人のふりをして歩き回くなどして地形を調べ、測量したと言われている。</p> <p>このような苦勞の末、領主に願いが聞き届けられ、天正9年(1581年)用水路(加茂井水)工事に着工し、13年の歳月を経た文禄3年に完成した。刑部は工事の途中亡くなったが、その後を浅右衛門と勘右衛門兄弟が力を合わせて完工に漕ぎ着けた。</p> <p>加茂村に昔から言い伝えられていた「嫁にやるなら加茂へはおよし、加茂はひばりの遊びどころ」とまで言われていた荒地で水田が拓かれ、嶺田三千石、加茂二千石と、この界限で二番目に多くの米が獲れる村になった。</p> <p>村人によって、井成神社が建てられ、祀られている。</p>
	ちゅうじょううこんだゆう 中 条 右近太夫 (生没年不詳)	<p>東嶺田の農民であった中条右近太夫は、江戸時代、嶺田地区の水不足・日照りの被害を解消するため、隣村の奈良渕から水を引こうと計画した。しかし、農民は許可なく別の村に行くことはできなかったため、罪が及ばないように家族と別れ、狂人のふりをして土地の測量を行った。</p> <p>そして、用水(嶺田用水)の建設を幕府に直訴し、用水建設は認められたが、幕府に直接訴え出るとは「越訴」という罪になるため、右近太夫は処刑された。</p> <p>小笠北小学校の西、「菊川」のほとりにある井之宮神社に、右近太夫が祀られている。</p>
茶業に貢献	みつはししろうじ 三橋 四郎次 明治 12 年(1879)生 昭和 33 年(1958)没	<p>四郎次(丹野生まれ)は32歳で村の議員になったのをスタートに、村長や県会議員を何度も務め、大正13年に衆議院議員、昭和15年に多額納税貴族院議員に推薦され当選した。</p> <p>政治の仕事をする中で、ヨーロッパやアメリカなどに出かけては外国にお茶を買ってもらうように努力し、「茶の三橋」と呼ばれた。</p> <p>また、学生時代から硯友社という文学を研究する会に入り、紫露草という俳句の会をつくった。四郎次は『光波子』と号し、俳句集を出版したり、俳句音楽の公演をしたりして活躍した。</p>

	名 前	功 績
茶業に貢献	<p>かんどう えすけ 漢人恵助 (本名：半次郎) 嘉永 4年(1851)生 没年不詳</p>	<p>恵助(川上生まれ)は、<b>手揉製茶技術者</b>として、全国的に知られた人物である。</p> <p>各地で勉強した後、職工 40 人余りを連れて、現在の静岡市梅ヶ島に入り、製茶技術を伝えた。そのほかの県下各地でも製茶技術にあたり、手揉製茶技術が認められて、外人商館より「天下一品茶製所」の扁額<sup>へんがく</sup>※を贈られ、天下一製法を確立し、さらに改良を加えて、青澄流と名付けた。</p> <p>また、茨城県、愛媛県や富山県などを製茶の巡回教師としてまわった。明治 35 年(1902 年)には、当時の農商務省より技術指導を命じられるなど、生涯を茶業発展につくし、多くの茶業組合から感謝状を受けた。</p> <p>(扁額<sup>へんがく</sup>※：門戸や室内などに掲げる横に長い額)</p>
	<p>もさぶろう 落合茂三郎 明治 32 年(1899)生 昭和 48 年(1973)没</p>	<p>茂三郎(六郷村上本所生まれ)は、20 歳で父の後(生葉の買付)を継ぎ、大八車と茶籠と棹秤<sup>さおばかり</sup>※で生葉を農家から買い、荒茶製造工場へ販売する仕事に就いた。そして、毎年の茶の生育状況をいち早く察知し、生産過剰地の製造業者による「タタキ買い」を防ぐ一方、不足する所へは生葉を素早く送り、古くなった生葉を揉むようなことを無くすため、<b>生葉流通に力を注いだ</b>。それにより、茶工場では常に新鮮な原葉(生葉)で昼夜操業を可能とし、より良質な製茶を市場に出すことで、<b>小笠茶の市場価値を高めた</b>。</p> <p>県西部の茶産地の至る所に集荷所を設け、生葉仲買業「モ」として県下に名を馳せた。生葉の買付は、東は富士周辺、西は豊橋や伊良湖岬まで行き、すべて現金商いで近隣の茶工場へ供給した。こうしてモ最盛期には、1 日の取り扱い量が六万貫(24 万 kg)にも達したと言われている。</p> <p>(棹秤<sup>さおばかり</sup>※：重量を計る器具)</p>
	<p>まる おぶんろく 丸尾文六 天保 3 年(1832)生 明治 29 年(1896)没</p>	<p>明治時代になり、大井川が舟で渡れるようになって職を失った川越し<sup>かわごし</sup>人足を救うため、<b>牧之原台地で丸尾原と呼ばれている一帯を開拓した</b>。</p> <p>開拓は重労働であり去る人もいたが、文六は家族と離れ棚草原に住み、人足達と一緒に仕事を続け、3 年後には約 30ha の茶畑を作った。</p> <p>その後、製茶を運ぶ道路の修復、地頭方の開港、製茶技術の指導、海外へのお茶の輸出、新式機械のある再製工場の新設(堀之内)なども行い、<b>茶の発展に大きな功績</b>を残した。棚草原水神社には、文六を称える石ぶみが残されている。</p>
	<p>こうさく 松下幸作 元治元年(1864)生 昭和 9 年(1934)没</p>	<p>松下幸作(南山村高橋生まれ)は 25 歳で小笠郡の茶業委員に選出され、27 歳の時、村内の有志と共に共同販売組合南山社を組織し、製茶の集荷販売を行った。さらに、現埼玉県入間市の高林謙三が発明・特許を得た製茶粗揉機<sup>そじゅう</sup>(高林式製茶機)の販売権を得て、明治 32 年に松下工場を設立、日本で初めて<b>製茶粗揉機の本格的な製造販売</b>を行った。</p> <p>また、幸作は川野村(現在の小笠東地区)の高力貢(こうりきみつぐ)、池新田の丸尾謙三郎と、明治 32 年 8 月 19 日、堀之内～南山間に<b>城東馬車鉄道</b>(社長高力、取締役松下)を開業した。これは、県内で 4 番目、遠州では最初の民営鉄道で、沿線には人家や商店が立ち並ぶようになり、鉄道は地域の発展に大きな役目を果たした。</p>

	名 前	功 績
産業に貢献	<p>内田<sup>さんべい</sup>三平            明治 12 年(1879)生            昭和 25 年(1950)没</p>	<p>西方村沢田に「内田式刃物工場」を設立し、大正 2 年、茶摘みの能率を上げるため「内田式茶摘みばさみ」を完成した。その後、本多光太郎博士から鋼の焼き入れ技術を、外国教師から溶接技術をならい、酸素溶接を取り入れるなど、改良を続けた。そして、「内田式茶摘みばさみ」を静岡県の特産品として県内外に広めた。</p>
	<p>落合<sup>のぶへい</sup>信平            明治 33 年(1900)生            平成 2 年(1990)没</p>	<p>信平（河城村西富田生まれ）は、大正 12 年 2 月 8 日に刃物工場を開業した。落合刃物工業の第一歩である。            そして、茶鋏の制作に取り掛かり、大正 13 年には本格的に茶摘鋏の製造販売を行うため新工場を増設し、着々と地歩を固めた。            昭和 31 年カッター式の新案特許を取得し、これに改良を加えて 34 年 3 月 5 日、国立試験場で行われた全国場長会議の実演で注目を集め、落合式茶摘機（カッター式自動茶摘み機）は一躍全国にその名を知られるようになった。昭和 56 年 10 月 8 日、西方地内の現在地に全面移転し、翌年には事務所・研究室を建設、59 年には組立工場も建設し、茶園に関する摘採や管理にわたる改良を進めた。</p>
	<p>落合<sup>とうはち</sup>藤八            明治 22 年(1889)生            昭和 19 年(1944)没</p>	<p>藤八（六郷村上本所生まれ）は、大正 5 年、父の指導後見のもと、兄が販売して好評を得た製茶用火炉工場（旭鋳物工場）を、六郷村本所の借地に建設した。            昭和 4 年 4 月、碍子金具の製造により可鍛鋳鉄を工場経営の主力とするため、旭鋳物工場を「旭可鍛鋳工所」と改称した。            昭和 6 年には、製品を可鍛鉄一本に切り替え、昭和 13 年には新工場を菊川駅北側に新築して、現在の旭テック(株)の前身の誕生となった。</p>
	<p>松本<sup>きさく</sup>喜作            明治 6 年(1873)生            昭和 7 年(1932)没</p>	<p>喜作（棚草村赤土）は、水田耕作面積の拡大や品種改良、増産などに力を注ぎ、新たな害虫駆除法の考案や、茶栽培などを取り入れた複合経営の成功など、稲作りの第一人者で「日本一の百姓」と評される。            大日本農会農産品評会で複数受賞後は、小笠郡農事巡回教師として技術指導に当たった。  <b>喜作と鈴木梅太郎・篠田治策の三人で「日本一の男」になると誓い合ったという話は有名である。</b></p>
教育に貢献	<p>成瀬<sup>なるせとういち</sup>藤一            明治 21 年(1888)生            昭和 44 年(1969)没</p>	<p>藤一は（西方村堀田）、女子教育の先覚者である。            大正 12 年 4 月、私立堀之内裁縫女学校を設立し、妻せきや職員と、校訓「至政-敬愛・親和・貞淑・明智・勇健」のもと、慈愛をもって訓育にあたった。昭和 10 年 9 月には、堀之内高等家政女学校となり、近隣の町村から小学校高等科を卒業した子女が通学するようになった。</p>
	<p>橋本<sup>まごいちろう</sup>孫一郎            文久 2 年(1862)生            昭和 12 年(1937)没</p>	<p>孫一郎（猿渡生まれ）は高陽舎で学び双松学舎という学校をつくり、40 年あまり他人から資金援助を受けずに農村の子どもたちの教育に取り組んだ。            国学・漢文・算術だけでなく農業も教え、特に力を入れたのは、心の教育であった。孫一郎自身、二宮尊徳の道德の教えを厳しく守り実行していた。</p>

	名 前	功 績
教育に貢献	<p>小田信樹 のぶき 弘化 元年(1844)生 明治 43年(1910)没</p>	<p>国の役人として東京から横地村に移り住み、私塾「梨園義塾」を開いて子どもや青年に読み書きを教えた。</p> <p>明治5年の学制頒布により、村人と相談しながら明治6年に常泉寺を仮校舎として東横地学校をつくり、子どもたちを指導した。</p> <p>明治10年に本市から去ったが、双松義塾の教え子が学校の仕事を進めたほか、信樹自身は学校へお金や品物の援助を続けて、小学校の充実に力を注いだ。</p>
	<p>橋本悟郎 ごろう 大正 2年(1913)生 平成 20年(2008)没</p>	<p>悟郎は(猿渡生まれ)、橋本孫一郎の子である。昭和9年に、世界一種類が多いといわれる植物を求めてブラジルに渡り、日本語の教師や博物館館長などを歴任する中、植物の研究に精力的に取り組み世界的な植物学者となった。ブラジルで生涯をかけて集めた標本は5万点以上ともいわれ、個人所蔵としては世界最大級とされる。著書も「ブラジル産薬用植物事典」「ブラジル植物記」など多数発刊された。</p> <p>平成10年には、旧小笠町初の名誉町民(菊川市誕生後名誉市民)となり、勲五等双光旭日賞を始め、数多くの褒章を受章した。</p>
芸術・文化に貢献	<p>栗田土満 ひじまる 元文 2年(1737)生 文化 8年(1811)没</p>	<p>土満(城東郡平尾村(今の菊川市中内田)生まれ)は、明和4年に、賀茂真淵の教えをうけ、39歳で本居宣長に就いて勉強した国学者(日本ならではの精神を研究する学問を勉強した人)で、遠州国学の中心人物の一人である。また、歌人としても有名であった。</p> <p>54歳の時(1790年)に、今の研究室や図書室のようなもの「岡廼舎(おかのや)」を平尾につくり、「国学や和歌」について教えた。著書には、「日本書紀」を解説した本「神代紀葦牙」などがある。</p> <p>昭和54年には、平尾八幡宮境内に記念の石碑も建てられた。</p> <p>石川依平(歌人)、栗田真菅(歌人)、小国重年(小国神社)ら、栗田土満の教えを受けた人も多くいた。</p>
	<p>鈴木哲太郎 てつたろう 大正 6年(1917)生 平成 13年(2001)没</p>	<p>鈴木哲太郎は(東横地生まれ)、早くから横地氏の城跡の保存整備と共に、史跡に対する関心の啓発にも力を注いだ。第二次大戦後には、有志と「横地城跡保存会」を結成し、自ら会長として城跡一帯の区画の調査整備と、平安時代末期の横地氏発祥以来、15代にわたる地方豪族の盛衰や中世武士団について、研究にあたった。</p> <p>このような調査研究のもと、横地城跡は昭和44年県文化財の指定を受け、次いで周辺50haを含め、御前崎とあわせて県立自然公園として指定された。</p> <p>また、横地城跡は、現在、国指定史跡となっている。(平成16年、高田大屋敷遺跡とあわせ「菊川城館遺跡群」として指定。)</p>



	名 前	功 績
芸術・文化に貢献	本間清雄 <small>きよお</small> 天保 14 年(1843)生 大正 12 年(1923)没	<p>本間清雄（石原（平川地区）生まれ）は、横浜でジョセフ・ヒコが始めた「海外新聞（日本で初めての新聞）」の発行に参加した。この新聞は、米英の新聞から日本に関係のあるニュースを翻訳したものや、横浜港で取引されている物品の価格を掲載していた。清雄は、ジョセフ・ヒコが口述した内容を岸田吟香<small>きしだぎんこう</small>と共に記事にする作業を行った。この新聞では、日本で始めて聖書の一部が翻訳されたものが掲載された。明治 6 年のキリスト教禁制の高札撤廃前のことである。</p> <p>その後、外務省へ出仕し、オーストリアの代理公使在任時には法学者シュタインと日本とをつなぎ、大日本帝国憲法の策定作業に貢献した。</p> <p>また、キリスト教に帰依し、教会の事務を無給で勤めるなど、近代日本における伝道活動を支える業績も残している。</p>
	菅沼貞三 <small>すがぬまていぞう</small> 明治 33 年(1900)生 平成 5 年(1993)没	<p>貞三は、渡辺崋山の研究の第一人者である。昭和 5 年、黒田記念館付属の美術研究所が文部省に移管されたのを機に、資料部閲覧係の仕事に就いたことで、渡辺崋山の作品と出会った。そして、崋山の初期作品を徹底的に調査研究し、新発見の真作 20 点を集めて「崋山の肖像画展」を開いた。</p> <p>文部省美術研究所を退職後、県立小笠農業高校講師、静岡大学教育学部非常勤講師などを経て、昭和 35 年に渡辺崋山を中心とした近世絵画の研究により博士号を受けた。</p> <p>昭和 53 年には、常葉菊川美術館名誉館長となっている。</p>
交通の利便性向上に貢献	山川辻松 <small>つじまつ</small> 安政 5 年(1858)生 昭和 4 年(1929)没	<p>御門地区（現：中内田）は交通の便が悪く、隣の加茂・堀之内に行くためには村境にある法然山<small>ほうねんざん</small>を越えなければならなかった。</p> <p>辻松は 1 人で法然山を調べ、トンネルを掘りはじめた。最初は冷たかった近所の人達も手伝いはじめ、この話を聞いた加茂村の人も加茂側から掘るようになり、明治 30 年に法然山トンネルが完成した。</p>
	内田良平 <small>りょうへい</small> 明治 11 年(1878)生 昭和 37 年(1962)没	<p>それまでの牛渕<small>うしぶち</small>トンネルは「あな」と呼ばれ、ツルハシやノミなどを使って人の手で掘り抜いた、暗く狭いものであった。六郷村の村長の良平は、当時の最高技術を使ってコンクリートの新しいトンネルに造りかえて、「山に囲まれた牛渕地区には、広いトンネルが必要。」という人々の願いを叶えた。また、工事で働いた村人には収入が入ることになり、苦しい生活の助けにもなって喜ばれた。</p> <p>他にも、村内各地で土木工事をを行い、村の発展に尽くした。</p>

資料：菊川市ホームページ